

活動報告：発達障害支援事業

1. 「発達障害支援事業」の目的と現状

2017年9月より、私立大学研究ブランディング事業「地域共生のための対人援助システムの構築」の一環として、自閉スペクトラム症、限局性学習症や注意欠如・多動症などの神経発達症や不登校の子どもやその保護者の方々の支援を目的とした活動を開始し、上記ブランディング事業終了後も継続している。

しかし、わが国において2020年1月16日に新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の最初の感染が確認された後、COVID-19感染が急激に拡大し、社会活動の制限が余儀なくされており、現在本学園においても大学・短大における教育の遂行を優先することとし、その他の活動は自粛することとした。同事業も同上方針のもと、2月末から9月末現在も活動を休止している。

2. 「発達障害支援事業」の活動状況

隔週火曜日、16時30分から18時の90分の枠で大野呂（特別支援教育コース教員）、畠村（公認心理士・スクールカウンセラー）、菅原（臨床心理士・スクールカウンセラー）、眞田（特別支援教育コース教員・小児神経専門医）の計4人が発達障害支援事業の活動を行っている。

利用者の実態：上述のごとく、本年2月末から9月の現時点においても活動は長期休止状態にあるため、2019年9月から2020年2月までの6か月間の同事業活動の利用者数、来訪理由、紹介者、支援などの概略を以下に記す。

- ① 利用者数：13名（のべ46名）
- ② 来訪理由（主なもの）；学習面の問題：4、対人・社会性の問題：3、不登校：3、
- ③ 紹介機関：医療機関；10、その他；1
- ④ 支援：定期的学習支援；1、定期的心理療法（含むスノーズレン活用）；2

なお、本学園におけるスノーズレンルーム（図）における活動の用途は以下の通りである。

- ① 心理療法との併用でリラクゼーション効果と不安軽減の効果を指す。
- ② 学習支援の前段階に利用し、集中力の向上を目指す。
- ③ 学習への集中度に関する運動療法との比較検討。
- ④ スノーズレンルームにおける音楽療法の意義の検討。

3. 学外医療機関との連携活動および成果の公表



図 本学園のスノーズレン ホワイトルーム
心理療法との併用でリラクゼーション効果と不安軽減の効果が得られ不登校の改善にも期待されている。

同支援事業は、2018年4月より大野はぐくみクリニックとの連携活動を行っている。本年度はCOVID-19が子どもにおよぼす影響に関するサーベイランス調査を行い、その成果を子ども子育て支援研究センター年報に題目「COVID-19感染拡大による休校措置の子どもたちへの影響—メディア記事・文献展望と神経発達症児の現状調査—」として投稿した。また2020年1月より福山市こども発達支援センターとの連携活動として、「就学前発達障害に基づく二次障害の発生頻度と一次障害との関連性に関する研究」を開始した。この研究成果を、演題「発達障害を伴う幼児の不安と攻撃性：カテゴリー的分析」として本年8月に日本小児神経学会にてonline報告し、演題「幼児用 Callous Unemotional Traits (CU) 評価尺度の意義」を次年度の日本小児神経学会で報告することとし演題登録した。また子ども子育て支援研究センター年報に題目「自閉スペクトラム症と不安」として投稿した。

4. 国際貢献

毎年ハノイにてハノイ国家教育大学とユニセフ共同で国際会議が開催されており、同場にてベトナムにおける特別支援教育の発展に寄与してきた。しかし2020年3月以降現在までCOVID-19パンデミックの影響で本年度のベトナムでの国際貢献は中止を余儀なくされている。

5. 今後の課題

COVID-19パンデミックの影響で同事業の構成メンバーも長期活動を休止している。パンデミック終息後、速やかに従来の活動を再開し、一層充実したものになるよう陣容の再編成を含め改革することが必要と思われる。

（文責：学芸学部子ども学科 眞田 敏）